

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：34310

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23280

研究課題名(和文) 高度経済成長期農村における「家事」「育児」の成立過程

研究課題名(英文) The process of constructing "housework" and "child-raising work" in rural Japan: in the 1950s and 1960s

研究代表者

岩島 史 (Iwashima, Fumi)

同志社大学・政策学部・助教

研究者番号：30745245

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、農村において生産と消費、公私の分離が進み、「近代家族」の要素がみられるようになる過渡期であった高度経済成長期を対象に、農村の「家事」「育児」を対象とする調査研究が家政学、農業経済学、都道府県農業試験場などによって異なる視点から行われてきたこと、1950-60年代の農村のコミュニティや世帯内においては、家電の導入は「近代」的な「家事」「育児」の成立よりも女性の過重労働の可視化と軽減の意味をもっていたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年のジェンダー史研究では、人びとの生きられた経験とそれに基づく主観性(subjectivity)を重視しながら、社会的に構築された女性の多様性と不平等に焦点をあてる研究が進んでいる。ジェンダー史研究では農村を対象としたものは少なく、農村研究ではジェンダー視点から分析したものが少ないが、本研究は農村において女性労働に注目し、かつ「家事」「育児」が「労働」としてたち現れてくる過程に着目することで、農村女性の実態と文脈に即した家事労働の分析を行うことができた。

研究成果の概要(英文)：This study shed light on how the idea of modern "housework" and "child-raising" in Japanese farm households was established under the growing market economy in the 1950s and 1960s. This study analyzed how home economics, agricultural economics and the prefectures or the government's agricultural experimental station targeted "housework" and "child-raising" in rural areas differently. Introducing home electrical appliances to rural families meant not the introduction of "modern" housework or child-raising but visualization and reduction of women's overwork.

研究分野：ジェンダー史、農村研究

キーワード：家事 育児 労働 ジェンダー 農村 高度経済成長

## 1. 研究開始当初の背景

本研究が対象とする日本の高度経済成長期は、家族社会学においては近代家族の成立と主婦の大衆化に特徴づけられる。家族社会学を中心に、「家事」「育児」「主婦」を対象とした研究は豊富に蓄積されている。しかしそれらのほとんどは、ある特定の時代と地域における家族の形態を一枚岩のものとして想定しており、たとえば都市と農村の差異などは視野に入っていないか、単線史的視点から「都市よりも遅れた農村」が前提とされている。農村研究においては、生産と消費が未分離な伝統的な家族農業経営において女性は抑圧されていたが、高度経済成長期を経て経営と家計の分離と生活様式の都市化が進み、女性の地位も向上したことが通説であり、近代家族論がそのまま適用できないことが経験的には共有されているものの、女性労働、家事・育児を対象とする研究は皆無に等しく、これまで農村における家事・育児や女性労働を農村の実態と文脈に即して捉えるための分析視角や概念がなかった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、主婦規範の浸透と家電製品の普及が顕著に見られた高度経済成長期農村において、「家事」「育児」が成立する過程を農村における新たな性別分業の構築と女性性の構築の視点から明らかにすることである。

本研究が高度経済成長期における農家生活を対象とすることには次の3つの意義がある。第1に、「近代家族」論などが農家生活を視野の外においてきたことから、農家生活における分業のあり方や家族労働の実態と女性の「地位」を論じる理論的枠組が欠如していること。第2に高度経済成長期の農家生活は「生産と消費が未分離」な状態から、農業機械や家電製品の普及を経て生産も生活も劇的に変化しており、それに伴って「家事」「育児」は労働内容や方法の変化を伴いながら、新たな概念として立ち現れてくる過程であったと想定できること、第3に戦後から1990年代まで継続した生活改善普及事業などによって、「家事」「育児」を含む農家生活の営みへの直接的な政策的介入が行われてきたこと。以上から、高度経済成長期農村は、「家事」「育児」が政策・市場・技術の介入をうけながら構築される場であったといえる。

## 3. 研究の方法

### (1) 表象としての農村「家事」「育児」の成立とその範囲 【主に2019年度に行う】

近現代日本の農家/農村女性の労働についての実証的な研究はほとんどなく、特に戦前期においては、家事・育児労働の詳細を知ることのできるデータがほぼ皆無であることが指摘されている(大門2006;谷本2003;2016)。このことは、農家・農村における家事・育児への調査・研究関心の不在を意味する。農村の家事・育児に関する研究や調査は、いつ、どのような社会的背景のもとで行われたのか。それらの調査・研究はなにを「家事」「育児」とみなしたのか。日本政府による統計調査、地方農政局や生活改善普及事業による調査、NHK生活時間調査、および研究者による学術調査における「家事」「育児」の定義とその捕捉範囲を分析する。また、農家生活への政策的介入をおこなってきた生活改善普及事業とマスメディアでは農村の「家事」「育児」をどのように規定し、その際に前提とされた「農村の女性性」とはどのようなものだったのか、同事業の活動事例集や農村で当時よく読まれていた『家の光』や『日本農業新聞』誌上の記事や商品広告を対象に、「家事」「育児」に関する言説と表象を分析する。

### (2) 農村女性にとっての「家事」「育児」の構築とその意味 【主に2020年度に行う】

高度経済成長期は、農村家庭においても炊飯器、洗濯機、テレビ、ラジオといった家電製品の普及が顕著に見られた。家電の導入される過程においては、それまでの家事育児労働を家電に代替するための家事・育児の手順や家事・育児労働に対する意識や規範の変化がおこっていたと考えられる。農村女性は日々の多岐にわたる労働(と認識されないものも含める)のうち、どの部分の労働をどのような理由で家電に代替し、それは彼女たちの主観性や自己規定にどのような影響を与えたのか。

当初予定していた農村女性へのインタビューは、新型コロナウイルスの感染拡大のため見合わせた。代替案として、1950-60年代に農家女性が生活改善の経験を交換するために発表し出版された『生活改善実行グループのあゆみ』から、家事・育児労働や家電製品の導入に関する女性たちの認識を分析した。

## 4. 研究成果

### (1) 農家世帯の家事育児労働に関する実証データの収集と分析

高度経済成長期に限らず、農家世帯における家事・育児の時間配分や方法を知ることのできる実証データを収集した。1920年代の帝国農会によるもの、1950-70年代にかけて農林省と地方農政局、農業改良普及所、農業試験場などが行ったもの、家政学分野の研究者によって行われたものを収集し、それらが異なった問題意識のもと農家の「家事」「育児」を対象化していたこと、また「家事」の意味する労働内容に差があることが明らかになった。農村に対する調査のまなざしと、学問分野としての家政学、農村社会学、民俗学などの成立にも深い関係があったことが示唆された。

### (2) 農家世帯向け家電製品の販売戦略

当時、最も農村に普及していたメディアである雑誌『家の光』の創刊号から1960年ごろまでの家電広告を収集し、分析した。家庭電化ブームとよばれた1950年代後半から60年代にかけて、都市向けの家電広告では、家事育児を主宰する近代的な「奥様」とその助手としての家電が描かれてきたことが先行研究で指摘されていたが、農村向けの家電広告ではそのような表象はほとんどみられず、「良い嫁」として家事労働を科学的に行うことが宣伝されていたことを指摘した。

### (3) 農村女性にとっての「家事」「育児」の構築とその意味

1950年代に生活改善普及事業によって組織化された生活改善実行グループのメンバーによって書かれた『生活改善実行グループのあゆみ』は、全国から体験文が集められた文集である。同文集には、家電製品の購入を家族に説得するために、グループメンバーによって行われた労働実態の調査が掲載されている。家電製品の導入とその過程での調査・交渉は、それまで家族に見えないところで行われていた“嫁”の家事を可視化し、過重労働を軽減することにつながった。ただし、性別分業の変更にはいたらなかった。また、農業の機械化がすすむ高度経済成長期には、農家経営の多角化も進められ、女性の労働が多方面に拡張されたこと、家事電化のなかでは洗濯機が最初に導入され、しばしばグループでの共同利用が行われてきたことも明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Iwashima Fumi、Sato Chizu	4. 巻 -
2. 論文標題 Revisiting “empowered rural women” in postwar Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Agrarian Change	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/joac.12494	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 岩島史
2. 発表標題 高度経済成長期農村における家電の普及と女性性の変容
3. 学会等名 近代女性史分科会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩島史
2. 発表標題 つくられる 農村女性 - 戦後日本の農村女性政策とエンパワメントの物語
3. 学会等名 中国農村女性研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Iwashima, Fumi
2. 発表標題 Rurality and Femininity in the Modernization of Japanese Family Farm
3. 学会等名 82nd Annual Meeting of the Rural Sociological Society（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Iwashima, Fumi
2. 発表標題 Gendered labor division in Japanese Family Farm in the Modernization
3. 学会等名 Royal Geographical Society Annual International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩島史
2. 発表標題 農村における女性労働の変容と女性らしさの構築－高度経済成長期を中心に－
3. 学会等名 ジェンダー史学会第16回年次大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 岩島史	4. 発行年 2020年
2. 出版社 有志舎	5. 総ページ数 216
3. 書名 つくられる 農村女性 －戦後日本の農村女性政策とエンパワメントの物語－	

1. 著者名 足立芳宏、伊藤淳史、名和洋人、森亜紀子、蘇淳烈、小谷稔、大瀧真俊、野間万里子、番匠健一、徳山倫子、岩島史、安岡健一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 447
3. 書名 農業開発の現代史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------